

早稲田大学歴史館「海を渡ったサムライ～朝河貫一展」によせて

——新発見資料の紹介——

甚野尚志・藤原秀之

はじめに

早稲田大学歴史館で2020年1月11日から2月28日まで「海を渡ったサムライ～朝河貫一展」が開催された。この展示は福島県立図書館が2018年6月8日から9月6日に開催した「海を渡ったサムライ～朝河貫一没後70年記念展～」に出陳された資料のレプリカを主としつつも、今回新たに発見された朝河関連資料を追加して展示したものであり、朝河貫一研究にとり様々な新しい事実を明らかにする重要な内容となった⁽¹⁾。展示はおおむね福島での構成を踏襲し、レプリカに加えて新発見資料を中心に現物を展示することで朝河のこれまで知られていない側面を明らかにした。本稿ではとくにそれら新発見資料について紹介することで、従来の朝河研究に対し、あらたな情報を提供することとしたい。

今回の新発見資料としてはまず、福島市立子山の高橋秀雄氏宅で発見された資料2点がある。一つは朝河貫一が東京専門学校卒業の頃に書いた恋愛の手記で、朝河貫一の恋愛観・女性観を知る上できわめて重要な資料であり、もう一つは、朝河貫一の父・正澄がアメリカ留学中の朝河を思い詠んだ長歌の書幅である⁽²⁾。

さらに早稲田大学演劇博物館が所蔵する朝河貫一の坪内逍遙宛書簡の4通も展示された。これらの書簡はすでに整理公開されていたものではあるが、従来の朝河研究、展覧会などでは紹介されてこなかったものであり、朝河が書簡を書いた当時どのような研究を行っていたかを窺い知ることができる貴重なものである⁽³⁾。

本稿では、前半で出陳した新発見資料の概要の解説を行い、そのうち高橋氏所蔵資料2点については後半部分に翻刻を掲載する。演劇博物館所蔵の坪内逍遙宛朝河貫一書簡の翻刻は、紙幅の関係から別稿を用意することとした⁽⁴⁾。

1. 朝河貫一の恋愛の手記と書簡

朝河貫一は妻・ミリアムとの死別後、何人かのアメリカ人女性（ダイアナ・ワッツ、ベラ・アーウィン）と恋に落ち、膨大な恋愛に関する日記や書簡を書いたことで知られる。朝河の日記や書簡からは、彼が恋愛を崇高な男女の精神的な交流と捉え、つねに自身の内面的な成長を求めて女

性との交際を行ったことが窺える。だがそのような朝河の女性観や恋愛観は、すでに朝河が東京専門学校の在学時には形成されていたといえる。そのことは、今回、高橋氏宅で発見された1895年（明治28）8月に朝河が立子山の実家で書いた恋愛の手記から如実に見て取れる。朝河は同年12月の渡米を前にして、この日本人女性と別れることになるが、同じ年の9月に出した訣別の書簡—朝河が所持していた書簡の控えに基づき『朝河貫一書簡集』（以下、単に『書簡集』とする）に「某日本婦人宛（案）」として翻刻されている⁽⁵⁾—の原本も今回、高橋氏宅で発見することができた。

高橋氏宅にこのような朝河資料が保管されていた理由は、高橋秀雄氏の祖父にあたる高橋春吉が立子山小学校以来の朝河の親友だったからである。高橋春吉（たかはし・はるきち、1868—1948）は当時の伊達郡立子山村に生まれ、立子山小学校で朝河の5年先輩の親友であった。彼は福島市の福島師範学校卒業後、福島県内の小学校校長（飯野町大久保小学校、石川郡小平小学校、安積郡片平小学校）を歴任し、退職後は立子山村に戻った。後年、名前を毅（はたす）と改名したので、朝河が出した高橋毅宛の書簡も同一人物宛のものである。朝河は高橋春吉に対して自身の生活にかかわる多くの親密な書簡を送っている。

ところで、高橋氏宅で今回発見した恋愛の手記と書簡の相手となる女性は長井ふく（結婚後、安藤ふくとなる）と思われる。朝河は『書簡集』に記載されている2通の書簡 [11.「某日本婦人宛（案）」1895（明治28）年9月4日、12.「田辺良平宛（案）」1895年9月9日] からわかるように、東京専門学校を1895年に卒業する頃、長く文通していた女性とプラトニックな恋愛関係にあったが、渡米を前にして最終的にその関係を終わらせている⁽⁶⁾。この相手は『書簡集』に収められている「高橋春吉宛（写）」[1894年（明治27）10月25日]の書簡で、朝河が文通している女性として言及される長井ふくである⁽⁷⁾。またこの書簡の注によると、この「高橋春吉宛（写）」書簡の文章の末尾には「昭和27年11月安藤ふく叔母より拝借してこれを写す」と（おそらくは所有者の高橋彰氏の筆で）記されている。ここから長井ふくが、朝河の伯母、安藤八重の長男の正司と結婚し安藤ふくとなった人物であることがわかる。安藤ふくの人物像については山内晴子氏が詳しく調べているが、それによれば、ふくは正司のいとこである未嵯夫との間の長男の信を連れて正司の後妻となった女性で、福島県女子師範学校の第一回卒業生であり、二本松市立幼稚園の園長を長期にわたって務めた人物であった⁽⁸⁾。

筆者の一人、甚野が立子山の高橋宅で発見したのは朝河が立子山に滞在していた8月に書いたこの女性への恋愛感情を吐露した手記の断片で、8月9日と17日の日付のものがある（またその内容を要約した一頁の英文もある）。手記によれば、朝河は帰省の途中で二本松の安藤ふくの家に二泊するが、実際に彼女と直接会ったのは一年前に一回のみで、これが二度目であった。朝河がふくと最初に会ったのは1894年（明治27）の夏頃、朝河が福島から上京する途中で彼女のいる本宮を訪ねた際である。そのことは「高橋春吉宛（写）」[1894年10月25日]の書簡で「長井ふく

氏は如何なる人が御聞申度候。小生上京の節、本宮ニ立寄面会仕り、其の純潔善良なるに驚嘆仕候」と書いてありわかる⁽⁹⁾。

この手記では以下のように、一年ぶりに本人と再会して朝河の恋愛感情が一気に高まったことが記されている。「然るに帰省の途中愛姉を訪ひて其の家に二泊せし後は凡て一変せり、愛姉を見しもの昨夏一たびのみ、一見して恋愛成り立ちしも始めは自識せず、只其純潔を賞し、次第ニ内部の恋愛意識の表面に浮びしなり、而して凡て一年間は書面にて往答せしのみ、固より互ニ恋ふることを明地には告白し得さりき、即ち相見は昨夏の一日にして、其の情は一年間書翰の上にて灯え来りし也、今や一年にして相見たり、恋人の一眇は一年の応答にまさりて百倍の印象を心に与ふ。相語れり、生ける彼女と相語り、相坐せり、其の夫と三人同じ蚊軀の中ニ臥して、彼女が呼吸の音すら余が心に吹き入りたる如く覚えき。而して遂に余は愛を告白し得さりき。かくて相別れたり、」

朝河は、立子山の両親のもとに帰っても彼女のことで頭がいっぱいであった。「帰省して後、悲憂は加はれり、実に行往坐臥寸時も彼女を忘れず、在京の時の如く一面に得意の色あること能はず、何とも名つけがたき苦悶腦中ニ横はりて実ニ何れの時も之を忘れず、食する時の如きも常ニ absent-minded にして父母の注意を牽かざるを得ざりき、父母に対しては如何に力めても婉容をつくらふこと能はず、夜食後団欒の時の外は終日無言なり。」

この手記からは、朝河が立子山滞在中にいかに安藤ふくへの思いで煩悶していたかがよくわかる。だが渡米を前にした朝河は、彼女に対し訣別の書簡を9月4日付で出した。それが前述の「某日本婦人宛（案）」書簡である。おそらくこの書簡は、後年、安藤ふくが高橋春吉に寄贈したものではないかと思われる。

2. 朝河正澄の書幅

また今回、甚野は高橋氏宅で、正澄がアメリカ留学中の朝河を思い詠んだ長歌の書幅も発見した。冒頭に「亜米利加に留学し居我が子貫一の許より桜花をおこされければ」とあり、アメリカ留学中の息子に対する父の思いを詠んだ長歌である。特に「包みし物の出でぬるを 開きて見れば思ひきや 桜の花の三つ二つ 過ぎにし春の匂ひさへ 色さへあせずありぬれば そも此の花はアメリカの 国に咲きしを かねて我が 愛づるをしりてはるばると おくりこしけむ」（引用にあたり一部を漢字、カナ書とし、濁点を補った。後掲翻刻参照）とあることから、朝河が父宛の書簡に桜の花を同封していたことがわかる。遠い異国の地にある息子を思い、その帰国を願う父のもとに届いた書簡には、父が愛した桜の花が添えられていた。そうした息子の深い思いに触れた嬉しさが素直に言葉になっている。この当時、アメリカ東海岸で日本の桜が植樹され始めていたことを考えると、朝河がイェールの大学院時代にイェールに植樹された桜の花を押し花にして正澄に送ったのかもしれない。正澄のアメリカで学ぶ息子への思いが切々と伝わる内容の書

である⁽¹⁰⁾。

3. 朝河貫一から坪内逍遙に宛てた書簡

前述したように今回展示した演劇博物館所蔵の坪内逍遙宛朝河貫一書簡4通は、これまでの朝河貫一研究では言及されてこなかったものである。朝河が東京専門学校時代の師でもある逍遙と深い交流があったことはすでに知られているが、ここではこの4通の書簡を中心に、あらためて朝河と逍遙の関係についてみてゆくこととする。

1892年（明治25）、東京専門学校の文学科に入学した朝河貫一は、坪内逍遙、大西祝らの教えを受けることになるが、なかでも逍遙には、その抜群の英語力を認められ、その後長く交流を続けることになる。朝河が福島中学の卒業式の答辞を素晴らしい英語で述べ、イギリス人教師ハリファックスを驚嘆させたことは有名な逸話である。そしてその英語力によって東京専門学校時代には学費を稼ぐために翻訳を行っていたことも知られているが、その仕事は朝河の貧しい境遇に同情した逍遙が、出版業者に斡旋していたものだという。朝河は『六合雑誌』の編集長でもあった横井時雄の主宰する神田キリスト教会青年会でも英文学の講義をアルバイトとして行っていたが、それもまた逍遙の推薦であった。のちに朝河は神田キリスト教青年会でラムの「シェイクスピア物語」の講義もする。当時、坪内逍遙は朝河にラムの書物の翻訳を勧め、いろいろと指導助言を与え、朝河は神田キリスト教青年会でこれについて講義しながら最後には全訳を完成させたという⁽¹¹⁾。

朝河の渡米後も、二人は親密な書簡を交わしているが、多くの書簡のなかで朝河は、自身のアメリカでの研究やイエール大学での境遇について率直に語っているが、こうした文通相手は逍遙の他にはいないだろう。逍遙が朝河に出した書簡でも逍遙自身の英文学研究に触れていたり、早稲田大学の状況を詳しく語るものが多く、両者が学問的に信頼し合った関係であったことがよくわかる。たとえば、朝河が日露戦後の日本の状況を危惧して著した『日本之禍機』を出版した時のことである。朝河は最初、『日本之危機』という題名で逍遙に原稿を送り、受け取った逍遙は当初早稲田大学出版部からの出版を検討したが、高田早苗の勧めで実業之日本社から出されることとなった。そして刊行にあたり、実業之日本社の増田義一から「危機」という表現は穏やかではないので変えた方がいいとの提案（異議）があり、最終的に「禍機」と改められ、後に知られるように『日本之禍機』として出版されることとなったという。この間の経緯はいずれも逍遙の朝河宛書簡で確認することができるが、書名変更については事後承諾であったようである⁽¹²⁾。

その後、朝河がイエール大学の財政危機で教職を解任されそうになったとき⁽¹³⁾、早大への転職の希望を逍遙に伝えたこともよく知られている。それについては朝河から逍遙宛の1920年6月20日付書簡に、早稲田の文科について言及した後で「もし早大にて希望とあらば、小生廿余年来歐洲法制史等ニ興味を有し候～帰りて後早大にて之を講じ、～余生を母校に捧ぐるだけの義気な

き二あらず」とあることが根拠とされる⁽¹⁴⁾。当時の逍遙の日記⁽¹⁵⁾をみると、同年7月24日に朝河からの書簡を受信している。他の事例を見ても朝河からの書簡は一ヶ月程度で逍遙の手に届いているので、すべてが逍遙の日記に記されているわけではないが、6月20日付書簡が届いたのはこの頃だと思われる。その後しばらく逍遙の日記に朝河の名は見られず、次に記されているのは翌1921年1月19日で、「朝河へ返書」と短く記されているのみで、果してこれが前述の書簡に対する返信かどうかは明らかではない。ただ、少なくとも朝河にとって、前年6月の書簡に対する好意的な返信、すなわち早稲田への就職が実現するという希望が持てるような回答がそれまでに逍遙から無かったことは、2月9日の逍遙の日記に「朝河より 帰朝して早大に就職したき旨申越す」とあることから明らかである。逍遙の手に2月に届いていることから、おそらく1月初旬、あるいは前年末頃に発信したもので、前年6月の書簡の後、逍遙から満足な回答が得られなかったことに対し、さらに早稲田への就職希望を示す内容だったと考えられる。度重なる朝河の要望を受けた逍遙の同年2月14日の日記をみると、「市島より朝河の件来信 高田へ朝河の事いひやる」とある⁽¹⁶⁾。市島は市島春城（謙吉）、高田は高田早苗、いずれも東京大学時代からの逍遙の盟友であり、高田は学長、市島は図書館長として、ながく大学経営の中枢にあり、1917年（大正6）のいわゆる「早稲田騒動」で一時第一線から退いてはいたが、この時期には再び重要な位置を占めるようになっていた。そんな二人に対し、逍遙が朝河の処遇を相談していたことがわかる。そして、1921年4月15日になってようやく朝河に本件に関する返信をしている。その書簡で逍遙は、「定めて返辞をお待兼と存じ気を揉みながら 確實なるお答への出来るまでと」返事が遅れたことを詫び、その上で早稲田騒動以来の大学の状況や文学科の教授法について、決して満足できる状況ではないので朝河を招聘したい気持ちは十分にあるが、「肝腎の結果はあまり香しからず候」と期待に沿えそうにないことを告げている⁽¹⁷⁾。

朝河の早稲田への就職活動は、逍遙のこの回答をもって終了したかに思えるが、実はその後も続いていた。同年5月15日付書簡では逍遙の尽力に感謝しつつ、さらに早稲田で教育に対する熱意を述べ、なるべくなら文科がいいが「特に文科（史科）に限るにあらず、法科に跨りてもよろしく候」と希望を伝え⁽¹⁸⁾、翌1922年8月20日には「更に又数言を相添度存候」として、自分が専門とする比較法制史研究が「門外の人には正確の理解を期し難」いこともあり、なかなか受け入れられないかもしれないが、「手早く申候はゞ、学校の為にも小生の為にも専門の学を用ひ候方が何よりも真実の利便と存候」、「只小生の学を（或は理会の足らざる為、或は他の事情により）学校が十分に用ひ難く候て、他に小生に相応の学を望まれ候ならば之を承はり置きて、一日も早く之に心がけ度候」、「早稲田の需求に応じ得るやう」「小生奉仕の最初の用意だけは為し得べく候」と早稲田への就職に強い意欲を示しつつも、現在「一書（九州南部の封建法制史）の準備中」なので、2年はアメリカを離れられないと述べている⁽¹⁹⁾。いっぽう逍遙は1923年の年末の日記に、その年あった出来事のうち重要事項についてまとめているが、その中に「朝河問題」との記述が

あり、この時期、逍遙にとっても朝河の就職問題が大きな懸案であったことがわかる。

その後、1924年8月24日付の朝河の書簡には「早稲田に関する小生の宿望につきては益々深く御配慮被下」とあり、かわらず逍遙の尽力があったことがわかるが、それに対して朝河は「年来の希望は毫も変わらず候」としつつも、帰国する余裕がないので「学校側の要求を具体的に承はりて後に進退仕度存候」としている⁽²⁰⁾。実は今回、あらたに福島県立図書館が所蔵する朝河関係資料中の逍遙から朝河に宛てた書簡により、この間の事情がさらに明らかになった。それは1924年7月15日付の書簡⁽²¹⁾で、この中で逍遙は関東大震災後の大学の状況、とりわけ文学科の様子を伝え、その上で朝河に対し帰国の意志を確認し、その際「先便には成るべくは英文科の一講座をも担当願ひたし云々と申入れたかと存じ候」と、当初朝河に歴史学以外の講座を担当するよう依頼したとある。1921年5月、さらには翌年8月の朝河の書簡は、そうした大学からの要望に対し、やはり専門の歴史学を担当したいという要望を伝えたものであり、そうした朝河の回答を踏まえ、今回は「お受持の事などはいよいよとなつて改めてお打合せ」とあり、朝河の要望に沿う形で対応が期待できる内容となっており、本書簡の1枚目欄外に“Rec. & ans.”、すなわち受信・返信の日付を“25 Aug. 1924.”と記していることから、8月24日付の朝河の書簡が、逍遙からのこの申し出を踏まえての回答だったことがわかる。

朝河の逍遙宛の書簡をみるかぎり、朝河の早稲田への転職欲求はイェールでの身分保障とは別に強いものがあったといえるが、一方で朝河の業績がイェールの歴史学部により認められ、彼が1923年から日本文化史担当から西洋中世史の授業担当者となったことが最終的にイェールにとどまった理由と考えられる。朝河は1920年6月の任期終了とともに日本文化史助教授の職を解任されそうになるが、その後、歴史学の教員の尽力もあり、同じ日本文化史助教授としてなお3年の継続雇用となった。ただしそれは、注13でも述べたように同じ地位だが給与が半額（年俸3000ドルから1500ドル）という条件であった。この時期、朝河はなお早稲田への転職を真剣に考えていたようである。だが3年後の1923年に朝河はイェールの大学院で「フランスの封建制」の授業を担当することになり、年俸もそれまでより500ドル増える。また1925年には『入来文書 (The Documents of Iriki)』を書物として完成させ（実際の出版は1929年）、歴史学の同僚の注目を浴びる。このような朝河の学者としての評価の高まりが、朝河にイェールにとどませた最大の理由であろう⁽²²⁾。

朝河と逍遙の文通は、転職問題以降も長く続き、朝河は逍遙没後、1939年に逍遙から送られた書簡70通余りを早稲田の演劇博物館に寄贈している⁽²³⁾。

以上、朝河の早稲田就職問題を中心に、逍遙との関係を確認してきた。ここからは今回展示された演劇博物館所蔵の逍遙宛書簡4通について個別に見てゆくこととする。

(1) 朝河貫一書簡 坪内逍遙宛 [1917年] 7月24日付 (演博6213)

本書簡は差出年を書いているが、発信地（相州小田原の白井氏別荘）から、朝河の第2回帰国時、すなわち1917年のものだと判断できる。本書簡では白井邸滞在時の読書内容について触れているが、中でも注目されるのはこの前年に刊行された津田左右吉の著作に触れている以下の部分であろう。朝河は

津田吉^(左右吉)左石氏の文学史の第一巻を見て居り候が、着眼の新らしきは喜ばしく存候 只訓練を欠ける独学者の弊到る処ニ見へ候は惜むべく候 猶第二巻も持参候間 玩読可仕候

と述べているが、ここにある「文学史の第一巻」が1916年に刊行された津田の代表作である『文学に現はれたる我が国民思想の研究』の最初の巻である「貴族文学の時代」（洛陽堂、1916年8月刊）であることは間違いない。また、これから読むという第2巻は1917年1月刊行の「武士文学の時代」であろう。

「貴族文学の時代」の冒頭には、逍遙が寄せた序が巻頭を飾っているが、そこには津田が直接逍遙のもとに原稿を持参したことが記されており、津田による同書の例言にも逍遙への謝辞が述べられている。序のなかで逍遙は「其観察や論断が、～普通の専門家の未だ道破してゐないことを道破したものであると認めざるを得なかつた。さうして少くとも私は、頻に同感を表し得る観察や推論に遭遇した」としているが、これは朝河のいう「着眼の新しき」と対応する。また逍遙は津田を評して国文学の専門家でないからこそ「とんだ見当ちがひへ足を踏入れることが無いとも言へまいが、とにかく其印象は、殆ど大抵独創的で、気任せで、爽新である～私は、此著によつて国文学史の研究上に一の新道路が開かれかけたことを祝福する」と称賛しているが、これは専門家ではない、その部分においては朝河が指摘するところの「独学者」ゆえの効用と言えるかもしれない。また、逍遙の津田著作との深いかかわりから推測すると、朝河所蔵の本書が逍遙から送られたものである可能性も捨てがたい。「玩読可仕候」の言葉には寄贈者である逍遙への敬意も含まれているのかもしれない⁽²⁴⁾。

(2) 朝河貫一書簡 坪内逍遙宛 1929年（昭和4）1月13日付（演博5918-3）

逍遙から『シェークスピア研究栞』（以下、『研究栞』とする）を送られたことへの礼状とその感想である。『研究栞』⁽²⁵⁾は、逍遙が早稲田大学出版部から刊行した『沙翁全集』全40巻の最終巻として、シェークスピア研究の「初学者を導く為の枝折」（同書緒言より）としてまとめたものである。朝河はここで同書の「シェークスピア即ペーコン論」で言及したウィリアム・ブース（Booth, William Stone, 1864-1926）について、「小生の親友」だとし、その研究内容を紹介している。

(3) 朝河貫一書簡 坪内逍遙宛 1929年(昭和4) 7月20日付(演博5918-1)

1月の書簡に続き、ここでも前半部分でブースの著作について言及している。そこで、この時期までのブースの「ベーコン論」に関する著作をみておこう。まず、逍遙が『研究栞』で言及しているのは“The Droeshout portrait of William Shakespeare”(著書1)であり、これは31点の画像を用いてドロウシャウトのシェイクスピア像とベーコンの肖像の比較、検討をしたもので、1911年に刊行されている。逍遙曰く「双方の画像をいろいろと取り合はせることによつて立証しようとした風変りの著書」である。そしてブースのベーコン論に関する著書には他に次の2点がある。いずれもシェイクスピアの著作に関する acrostic についてまとめたもので、そのうち朝河が言うところの大著とは“Some acrostic signatures of Francis Bacon”(著書2)と思われる。ベーコンとシェイクスピア双方に関連する著作にあらわれた acrostic を丹念に調査したもので、1909年刊行の600頁以上の大著である。本書簡は、逍遙があたかもこの大著を寄贈されたかのような礼状を送ってきたことに対し、実際にはそうではなく、朝河が贈った本は「私の申し候大著ニあらず、その補加ニ過ぎず候」と言っている。ただ朝河はこの大著について「所謂隠れたるアクロスティック、レッタースを赤色にて印刷せしめ候」とあるが、実際に同書を見ると赤字印刷された部分は見当たらない。

では朝河がこのとき贈ったのはブースのどの著作だったのか。おそらく同じく acrostic をまとめた別の書、“Subtle shining secrecies writ in the margents of books generally ascribed to William Shakespeare, the actor and here ascribed to William Shakespeare, the poet”(著書3)だと思われる。こちらは1925年に刊行された300ページほどの著作であり、ブースはその序文で執筆にあたり世話になった3人の人物のうち一人に朝河の名を挙げている。こちらをみると acrostic 部分、すなわち縦読みにした場合に言葉になる部分が赤字で印刷されている。おそらく朝河が逍遙宛の書簡で「赤色に印刷せしめ候」というのはこの部分のことであり、朝河のなかでも著書2と3が混同されていることがわかる。そして現在、上記の3著はいずれも逍遙から早稲田大学に寄贈され演劇博物館に収蔵されており、特に acrostic に関する著書2、3には見返しには Booth から朝河への献辞がある。つまり、ブースから朝河へ、朝河から逍遙へ、そしてそれが早稲田大学へと寄贈されたものだということがわかる。

本書簡後半では、朝河の主著の一つであり、第2回帰国時調査の成果である『入来文書』が刊行されたことを告げている。「ブース君の大著の如く部数少く印刷費多く定価高」いので、日本の図書館では早稲田大学図書館にのみ寄贈したので、それを見てほしいと言っているが、事実早稲田大学図書館には現在朝河から寄贈された『入来文書』が収蔵されている。さらに「之とは別にオックスフォードの教授の主管せる経済史雑誌と、ハーヴァード大学出版の同種雑誌とに二の論文を去る一月と二月とに発表仕候、是亦日と欧との領地を経済史と法制史との立場より比較したるものニ候。是ハ既に欧の学者より多少の評判ニ預かり候、独創の貢献といはれ候」とある。

1929年1月、2月付で朝河が発表した論文には次の2つが知られている⁽²⁶⁾。すなわち、

A. “Agriculture in Japanese History: A General Survey”

(“Economic History Review”, vol.2, no.1, January, 1929.” 収載)

B. “The Early *Sho* and the Early Manor: A Comparative Study”

(“Journal of Economic and Business History”, vol.1, no.2, February, 1929.” 収載)

である。Aは中世史家として有名なロンドン大学のアイリーン・パウア (Eileen Power) が創刊した雑誌だが編集者の一人にオックスフォード大学の教員が入っているのが「オックスフォードの教授の主管せる経済史雑誌」と朝河が書いたのだろう。Bはハーヴァード大学から刊行されている経済史の雑誌である。「既に欧の学者より多少の評判ニ預かり候」とあるので、これから刊行される雑誌に投稿したというより、発表済と考えられる。

(4) 朝河貫一書簡 坪内逍遙宛 1931年(昭和6) 9月20日付(演博5918-2)

本書簡は、朝河が当時どのような研究を行っていたかを知る上でとくに興味深い書簡である。ここでは取り組んでいる論文として「一つは鎌倉時代の武士(就中御家人)の知行に関する原則を欧(殊に独と仏と)の相応原則と対比する一端に候。短文に候へども、日本にての原則ハ従来の学者の眼を逸し来り候故、全然、実文書の中より出し来るの外に術なく、頗る六つかしき仕事と思はれ候。」と述べているが、この論文は、“The Founding of the Shogunate by Minamoto no Yoritomo” のことであり、プラハの *Seminarium Kondakovianum* というビザンツ研究の雑誌に1933年に掲載された。論文の内容がまさにこの書簡で書いてとおりのものである⁽²⁷⁾。また、もう一つ取り組んでいる論文として次のように言われる。「今一つの論著ハ、之よりは数倍の長さにて、之ハ純に欧州法制のみニ関し候。フランク時代の奇なる王権の本体を、その立法権の方面より考えて従来の欧州学者の諸説と私見とを対比するものニ候。全く当時(第六世紀より第十世紀末まで)の立法原材料を根拠とし、自分の結論を述べ候。独学者の説に或ハ合し、或は反し、往々私だけの結論も立て候。既に過半脱稿致候へども他事ニ忙しく、且つ今後久しくあらゆる諸点を厳しく自ら批判するを要し候へば、成稿までには少なからざる時間を経過すべく候。」これはイエール大学の『朝河貫一文書』に草稿が残っている“The Legislative Powers of the Frankish King” という未完成の草稿のことである⁽²⁸⁾。

おわりに

今回紹介した新資料は、朝河貫一に関してこれまで知られていなかった側面を明らかにした点できわめて価値が大きい。高橋氏所蔵資料は、朝河の青年時の女性観、恋愛観を知る上で貴重なものであり、また逍遙宛書簡からは、これまで経緯がよく知られていなかった朝河の早大転職問題や、朝河の津田左右吉の著作への評価、さらに朝河自身の研究内容などを見て取ることができ

る。その意味で、今回の新発見資料は朝河研究をさらに進めるために意義あるものばかりである。

朝河貫一は没後、著作や論文として刊行したもの以外、膨大な研究のノートやメモ、日記、書簡などを残したが、それらはイェール大学のスターリング記念図書館に『朝河貫一文書 (Asakawa Papers)』として整理され保管されるとともに、書簡や写真など朝河の私的な遺産とみなされたものは福島の遺族に返還され、福島県立図書館に『朝河貫一資料』として所蔵されている。しかし、イェールの『朝河貫一文書』と福島の『朝河貫一資料』には所収されていない多くの書簡などの資料もなお多く存在しており、それらが少しずつ明らかになっている状況である。今回の展示が新たな朝河貫一関連資料の発見と朝河研究の新しい進展につながることを期待したい。

なお本稿は、「朝河貫一学術協会 第八回研究会」(2020年2月26日)での甚野、藤原それぞれの報告をもとに、その内容の一部をまとめたものである。研究会席上で貴重なご意見をくださった参加者各位にあらためて御礼申し上げる⁽²⁹⁾。

【付録】

以下に今回紹介した資料のうち、高橋秀雄氏所蔵資料(朝河貫一手稿、朝河正澄書幅)について全文の翻刻を掲載する。なお、翻刻は筆者の一人である藤原が行った。

朝河貫一手稿

〈凡 例〉

- ・資料は料紙2枚の両面に、表裏で天地が逆向きとなる形で墨書されている。
- ・文中の旧字(異体字含む)は新字に統一した。本文中の()、「」, 傍点、圈点は原本のままである。
- ・文中、明らかな誤字、当て字には傍注を加えた。
- ・原本中の句読点はそのままとした。
- ・各葉表裏の区切りを〈1表〉～〈2裏〉で記し、次葉の字句をその後に追い込みで表記した。ただし、原本が改行している場合は改行した。

(3文字朱書)

二十一 廿八年八月九日しるす

「ゆらのとを わたる舟人かぢをたえ、ゆくへもしらぬ恋の道かな」
滞京の間ハ「我れ稍々人事の「実」を見たり、今やしばらく、現実のドラマを見んとしつゝあり、人寰を演劇視するは不可にして、遂ニ之を寺院視するに至らざるべからざるは勿論なりと雖、後者に達せんには前者を経る時あるべし、今や將に其の妙ニ入らんとははじめつゝあるなり」と誇り思ひき「而して、かく概念期より進みて実観期に歩を入れ初めたるは全く愛姉が為なり、愛姉ニ

対する余が情より、余は究竟の疑を得たり、又此の如き旭光を見たり、愛姉と融合せしだけは天地と融合したり、愛姉の見ゆるだけは神見ゆ、要するに今の余は愛姉に作られたるなり」「見よ、昨年まで余は多人数の間ニ立ち、もしくは行く時肩の縮まらんとするを覚えしが、今や路人を見るに劇場に躁躍^(躁躍カ)せる人物を見るが如く、心鬱せる時は路人を眺めて思を遣るを得るに至れり、余は路人と融合して一体となれる如く感ずる瞬間すらあり、又天空も日月も草木も、凡ての自然界及び禽獸虫魚までも余が骨肉たる想あり、天地靈然として余と同体の朗光の裡ニあり、囀づる鳥、輝く月いづれかわが心に会せざらん、余未だ神靈と包含せされども、次第ニ包含せんと進みつゝあるなり、是れ皆愛姉ニ対する情ニ教へられたるものなり」かく思ひき、又愛姉ニよりて『感応』てふことの深意を覚えたり「感応即ち融合なり、凡て天地のこと知解の如きは初歩ニして融合即ち極致なり、今われ愛姉と融合せんと進む、而して神靈と融合せんと進む、愛姉と融合して全からば神靈と全く融合せん、神靈と融合して始めて如々の光に入り何ものにも自由自在に同情せん、今や日月、友人、師、と融合せずして悶ゆることあり、実ニ融合の情迫りて、神何故ニ我ニ合せざるやと殆ど咆哮せんとすることあり、即ち愛姉ニよりて融合の快と苦とを嘗めんとす、即ち愛姉は余をして従来有ちしもの、真の道ならざるを知らしめて余を懷疑の底に落し、又融合の実を思はしめて余に達道の方法を教へ又愛によりて神靈の存在を余ニ示したり。従来此愛ほどの大なる師を余は持ちしことなかりき」かく思へり、中桐君が亦恋愛する所あるを聞き、「愛あるもの天ニ至寵を拜謝せざるべからず」とて之を祝したりき

要するに余は今や神のふところニ入らんとするを覚え、天地の温かさを感じて、一面に快き所ありき、友人亦余の此一面を認めき、(勿論他面には融合全からざるを歎く〈1表〉悲甚しかりしも)然るに帰省の途中愛姉を訪ひて其の家に二泊せし後は凡て一変せり、愛姉を見しもの昨夏一たびのみ、一見して恋愛成り立ちしも始めは自識せず、只其純潔を賞し、次第ニ内部の恋愛意識の表面に浮びしなり、而して凡て一年間は書面にて往答せしのみ、固より互ニ恋ふことを明地には告白し得さりき、即ち相見は昨夏の一日にして、其の情は一年間書翰の上にて灯え来りし也、今や一年にして相見たり、恋人の一瞬は一年の応答にまさりて百倍の印象を心に与ふ。相語り、生ける彼女と相語り、相坐せり、其の夫と三人同じ蚊麈の中ニ臥して、彼女が呼吸の音すら余が心に吹き入りたる如く覚えき。而して遂に余は愛を告白し得さりき。かくて相別れたり、帰省して後、悲憂は加はれり、実に行往坐臥寸時も彼女を忘れず、在京の時の如く一面に得意の色あること能はず、何とも名つけがたき苦悶脳中ニ横はりて実ニ何れの時も之を忘れず、食する時の如きも常ニ absent-mind-ed にして父母の注意を牽かざるを得ざりき、父母に対しては如何に力めても婉容をつくらふこと能はず、夜食後団欒の時の外は終日無言なり。

福島二行きて中桐君と語ること凡て一週、殆ど同じ地位に在るをもて深く相同情したり。同君は余ニ告白をすゝめたり。尾形君は吉岡氏と語るに皆空虚の概念的ニして余等二人の如く「実」を味ひ居らず、而かも余等は苦悶し合へり、時として互ひニ自ら笑はんとし合へり。余は此間、恋

愛は男女間の強き同情のみ、と思ひしことありしも、中桐君の恋人と相語るに及びて恋愛と同情との相異なるを証せり、余は彼女ニ同情して戦慄したり、而も余は之を愛せん^の心なし、昨夏長井姉と別る、時は地より抜き去らる、稲の如く自己を感じたり、又同姉を思ふや常ニ紅塵万丈の中ニ涓々の泉を得たる如く、もしくは天女のふところニ入れる如き sweetness を感じ、又実の底深くして云ひ難き bitterness を感じたり、而して渡辺姉ニ対しては然らず。疑もなく余は渡辺氏が「かどをつけざれば死来る」の一語によりて同情の苦を受けたり、又人生の一面を前日より一層強く味ひたり、しかれども此等の情は皆長井姉ニ対する情の中ニ溶解し去るなり、余は実に愛のミステリーを感ぜざるを得ざりき

福島より帰りて又々常ニ愛の苦悶を感じて片時も脱せず。且つ安藤氏にも同情するが故ニ苦悶は数倍なり。今や天地山川鳥獸及び人類は前日の如くニ余を楽しましめず、むしろ余を苦しめんとす、谷口新之助余の傍に在りて、余はうるさしと思ひき、嗚乎何等の激変ぞや。余はユーゴーのミズラブルを取(1巻)りて読みしが、勿論其の中の深刻の記事ニ同情すること前年の比にあらざるべけれど、之を読む時は、眼をはなして悶思する時の半ばだもなし、只々悶思しては父母に怪まるべければ此本を握れるのみ、母は、余が物をもいはず、人々にも言葉をかけず、只々沈黙して日夜同じ本を握れるを見、「左様ニ読書にとりては傍に在る我々は憂に堪えがたし」といはれき、知らずや余は読書にこれるあらざることを

余は痴情に弄ばるゝにあらざり、大なる實在にふれて煩悶せる也、愛姉の為ニ煩悶するは余が最大の光榮也、又最大の責任也

夜間臥床に横はりて後も苦悶す、苦悶せざるは眠れる時のみ、然れども愛姉は福島より帰りて後再び夢に入れり

一日少女来りき、余は直ちニ其の愛姉と関係あるものなるを知れり、余は之と相歩めり、彼は長井姉は郷里ニ行きたれば余来れるなりといひき、余は実に絶望したり、汝は誰ぞと問はんとして果さざりき、余は其の無邪気ながらも長井姉ニ比して純潔ならざるを思ひて横行せざるを得ざりき、是れ八月四五日頃の夢にして新之助傍に臥し、時なり、

八月八日、新之助の帰日の夜の夢は、長井姉来れるを見たり、如何ニして何時来りしやも知らず、余は何故にや昼間臥床の上ニ坐してありき、彼は来りて余が傍に坐して何か雑誌様のものを読みしが、一文章を読み終らんとして之をすて他の文を見んとせし故余は彼が肩を捉へて、御身は最後の方に至りて倦まんとするかといひて笑ひき、既にして肩を接し相共に坐しながらかゞみて其書を読みしが余は明かに彼が体温を感じたり、既にして彼は余と離れ坐し何か談話せし時、母来りて昼飯の膳を彼が為ニ据へて笑ひつゝ去れり、余は不図其の夢なるを思へり、然れども成るべく此夢覚めざれと願ひ、否覚めても詮方なしと思ふ途端夢覚めたり、如何に彼女の来らんを待てるかを見るに足らん、

余は愛姉ニ対して重任し生来始めて触れたる最も荘嚴、神聖なる重任しを負へり、故ニ彼女を見

ざるべからず、此重任を果たさざれば、余は何事も為すを能はず、

————— 〈2表〉

「あひ見ての後の心にくらぶれば、むかしはものを思はざりけり」このものおもひは解剖も、命名も能はず、仮りに名づけて煩悶ストテツグルといふ時は既に虚言也、既に他に名なきが故ニ暫く此名を用ひん、

最も煩悶するものは最も幸福なる者なり。何となれば凡て煩悶は神のさしまねぎなれば也。最も多く煩ふ人は最も多く天寵を受くるものなれば最も多く天ニ感謝すべし。

煩悶するは左せんか右せんかの矛盾コントラヂクシオンを含めば也

すべて矛盾は、之を一歩高き調和の中ニ溶解する時は、吾人をして達道せしむべし。一對の矛盾は宇宙全体を暗写するが故に、何にても矛盾を解けば平等の光に入る也。矛盾の鋭くして迫れるほど幸也。

吾人の愛は少くとも十個の大矛盾を含む、其の何れの一つにても解き得ば人性を達観するにあまりあり。嗚乎、余が愛は何等の大矛盾ぞ、又何等の大天寵ぞ

恋愛は恐らくは最大なる矛盾の一つ也、恋愛全ければ超越して本生に入る。我等が恋愛は殊ニ矛盾鋭く且つ多き恋愛也。十個の矛盾左の如し。(主として愛姉の地位より立言す)

、一、良人と余

○九、男性と女性

△二、恋愛と義理

、十、遠と近

○三、霊愛と質愛

○十一、公然と秘密

△四、真生命(道)と社会の制度

○十二、飛躍と墜落

○五、真生命と恋愛

、六、本憂と境遇の憂

○七、概念と実地

○八、少数の愛と普遍の愛

○ハ恋愛の通状 △は多くある性状

、は今特殊の状

次に相見ん時余は二つの方針を取らん、余は之を天の御旨と信ず、此他に取るべき道あらず、是れ必然の道なり、即ち Confession and Elevation 也、昨日愛姉に送りし書には故さらに後者のみを書きしも、前者を経ずば後者に上ること能はず、前者の鋭きを自識せしめ然る後之を後者の中に融解するなり、之にもまして有効の法豈在るべけんや

而して前者に注ぎし涙もて、彼女が境遇に驚かざることを熱願せざるべからず 〈2裏〉

2.

〈凡 例〉

- ・資料は二つ折の料紙2枚を右端1か所で紙縫綴したものに墨書されている。
- ・文中の旧字（異体字含む）は新字に統一した。本文中の傍点、圈点は原本のままである。
- ・文中、明らかな誤字、当て字には傍注を加えた。
- ・原本中の句読点はそのままとした。
- ・各半葉ごとに「」で区切り、それぞれ（1表～2裏）とし、次葉の字句をその後に追い込みで表記した。

〈翻 刻〉

八月十七日試みニ恋愛にこもれる矛盾、撞着をかぞふ

一、霊と肉

単ニ霊といひ肉といふは消却的空辞ニあらざるか、苟くも真の恋ならば肉より入るも霊に入るニ
あらずや、又霊において相結ぶものも肉の交を否まざるものあるニあらずや、且つや霊は肉に宿
る、肉は霊を妨ぐる時の外は霊の敵ニあらず、霊恋を主張する我等すら肉の中ニ在り、又肉交に
よりて世ニ出でたり、凡て霊恋の天地を実現すことも、其の各員は皆肉の子ニあらずや、又この
理想的天地を永続せんとせば肉交を愛するニあらずや。凡て天下の公衆の心となりて考へざるべ
からず、我のみ霊恋を主張するは豈概念を楯となし境遇の詮なきまゝに一種の利己的理想を夢む
るものニあらずや。さらば真の恋愛は、空言の霊と空言の肉との二つを超ゆる大調和なるを要す
而も我等は今や肉を敵視す、愛姉ニ向かひては指をも触るゝ能はず、相離れて思へば次ニ相見
る時握手せんと思へど其の時ニ臨みては五体石の如く堅まりて衣服だに相触れがたし、今夏蚊帳の
中にて余静かニ愛姉の方ニ頭を向けしに愛姉亦正ニ余を見居りしを見、遽然頭を復し堅く腕を組
みて又断じて愛姉の方にふりむく能はず、心中一種の苦しみを覚えたりき

二、真生命と恋愛」（1表）

こは人類の真生命と恋愛との関係にして、恋愛は超脱して真生命の中ニ溶け去るべし、恋愛は明
かニ自滅矛盾を性とす

三、男性と女性

恋人が、さしも融合する所以は、互ニ異性なるにあらずや、而も同性ならんことを我等は望むニ
あらずや、霊の其のまゝにして同性とならんことを望む、是亦矛盾也

四、公然と秘密

恋愛もし真恋ならば何ぞ秘密にせんや、もし公けニ恋へがたき所以の事情を悉く社会より取り去
るとも猶ほ我等は恋愛を秘せんとするニあらずや

五、少数と普遍

恋愛は兩人間に他人の一指をも入れしめざらんとす、他人間に立つ時は我等は只偽善家となりて寛大を装ふのみ。又恋愛によりて人性の和氣を解し、人情を悟りて他の人々をも愛するニ至れども、そは博愛、情愛ニして恋愛にあらず、恋愛は厳に二人に限られたり。是れ矛盾なり。もし真生命に入らば、その偏頗の愛は如何ニ変ずべきぞ、悟れる人は恋愛なからんか

六、飛躍と墜落

九天の上に飛越し、九地の下に墜落するの境恋にあり、恋は最も甚しき生死の謎なり、我等はお凡てを抛擲して此の中ニ入り、二方の何れかニ加はる、恋は此の」(1裏)大撞着を含む。恋は人生の活如たる縮画也

七、恋愛と義理

世の中の義理と、恋との対向なり、此矛盾に倒れしもの幾何ぞや。義と恋とを結ぶもの即ち真生命ならざるべからず、この中ニ入りて義も恋も活くる也

八、真生命と社会の制度

こは論の矛盾の一半也、(七)を開きて(二)及び(八)となす。

九、本憂と境遇の憂

恋愛は直ちニ境遇にかゝる憂苦を來たす。而して凡ての人生の憂苦は、彼れ未だ道を得ざれば也、道を得ざる憂即ち本憂をば速かニ自識して、この本憂を体して道を求めざるべからず。境遇の憂などは天が我等をして奮然本憂に上らしめんとて、さしまねぐ也、しかも恋愛より來る境遇の憂は往々恋人をして堪えがたからしめ、本憂の中ニ之をとかしがたからしむ

十、概念と実地

十一、良人と恋人

恋人ありても良人を愛することを得べきや、こは偽善ならざるか。否、婦人は能ふなりとユーゴーは教ふ。同時に二人を恋することは出来ざるも、一人を恋へて、他を只愛する」(2表)ことは婦人は能ふべし。然れども肉交の時など、罪を犯したる如く毎度考ふべし。而も強き婦人は之に堪ふるを得べし。

然れども其の苦しみ如何なるべき、実ニ同情ニ堪えがたきものあり

十二、遠と近

既に恋愛ならば遠方ニありても毫も哀しむべき理なきニあらずや、相共ニ居らんことを切望するニあらずや、恋人相離れ居りて無限のスキートネスとビッターネスとを共ニ感する所以のもの思ふに偶然ならず

同居は靈の交通に便なるによりて然るか、而も人事は、左様に都合よく行くものニあらず、悟りて後ハ如何なるべき」(2裏)

朝河正澄書幅「亜米利加に」

〈凡 例〉

- ・資料本体は紙本墨書で、緑地に金茶色の一文字、縁を付した明朝仕立ての表装となっている。
- ・文中の旧字（異体字を含む）は新字に統一し、変体仮名は一般に通行するかな文字とし、くの字点は用いず前の文字を繰り返して表記した。
- ・句読点が使用されていないので、文意によって適宜空白をいれた。改行は「／」で示した。

〈翻 刻〉

亜米利加に留学し居我か子貫一の許より桜花をおこされければ

いほへなみたちへたてたる にしのかた海原遠きことくに、もの学ひ居るおのか／子は いか
にあるらむ 帰り行くかりにもつてをたのむへき よすかあらねは おきつ／なみたちかへる日
を ゆひ折りて待ちつ、あれハ ゆくりなくけふにも文そ届き／ぬる つゝかなきてふおとつれ
を よみつゝゆけはさゝやかに 包ミし物の出てぬるを /開きて見れはおもひきや 桜の花の
三つ二つ すきにし春の匂ひさへ 色／さへあせすありぬれは とも此花はあめりかの 国に咲
きしを かねて／我か めつるを知りてはるはると おくりこしけむ わたつ海の八重のしほ／
路をへたてぬる 我か日の本に居なからに 見るそうれしき親をおもふ /我か子のふかきこゝ
ろおもひは

おぐられし 花の香よりもおくりぬる

人のなさけの ふかくもあるかな

正澄

注

- (1) 2018年に福島県立図書館で開催された特別展示などの朝河関連行事については、福島県立図書館がインターネット上に上げている「朝河貫一没後70年記念事業」実施報告 (<https://www.library.fks.ed.jp/ippan/tosyokanannai/kankobutsu/kyodo/kj590003.pdf>) に詳細が記載されている。なお福島県立図書館では、記念展示の出陳資料すべてのレプリカを作成し「展示セット」として貸し出しを行なっている。(<http://www.library.fks.ed.jp/ippan/shiryoannai/asakawasetkouhou.pdf>)。
- (2) 立子山の高橋氏宅での新資料発見については福島県の地方紙『福島民報』2019年12月21日の紙面で「朝河博士の日記、書簡発見」として大きく取り上げられた。
- (3) 早稲田大学演劇博物館所蔵の朝河から逍遙に宛てた書簡4通の存在については早稲田大学歴史館学芸員のChang Boye氏からご教示いただいた。またChang Boye氏には今回の展示の構成や展示品の写真撮影など展示に関わる業務全般を担当していただいた。心から感謝申し上げます。
- (4) 藤原秀之「坪内逍遙と朝河貫一 書簡を通じて見た学問上の交流」(『日本史攷究』44、2020年)。
- (5) 『朝河貫一書簡集』(早稲田大学出版部、1990年)、107-110頁。
- (6) 『同上』、107-115頁。
- (7) 『同上』、100-101頁。

早稲田大学歴史館「海を渡ったサムライ～朝河貫一展」によせて

- (8) 山内晴子『朝河貫一論』（早稲田大学出版部、2010年）、102-104頁。山岡道男ほか編『朝河貫一資料 早稲田大学・福島県立図書館・イエール大学他所蔵』早稲田大学アジア太平洋センター、研究資料シリーズ No.5、2015年、367頁。
- (9) 『書簡集』、101頁。
- (10) 朝河貫一の立子山時代については、参照、甚野尚志「歴史家・朝河貫一への旅(3)―立子山時代、正澄と貫一―」『エクフラシス―ヨーロッパ文化研究』（早稲田大学ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所）、10号、2020年3月、1-23頁。
- (11) ここで述べた朝河の英文翻訳に関する事実は、立子山小学校校長であった鈴木喜助が書いた朝河貫一の伝記『朝河貫一』による（手書き原稿、1953年、筆者は山内晴子氏所持のコピーにより閲覧）。鈴木喜助は朝河が行った翻訳の例として朝河波仙のペンネームで訳した『ヴェニス の 賊』という翻訳を挙げ、朝河の友人・服部保一がその翻訳を保持していたため鈴木もこの翻訳を閲覧できたことを述べ、その印象を以下のように語る。「その内容は、美濃紙の罫線百枚に毛筆で細かく記されていて、訳文は『第一編、第一、ヴェニス。日暮れとなりぬ、光を浴びたる軽き雲は片々に空をおおい、今しも満月は徐々に上りて、アドリヤチックの海の面に光をまけり。四面八方肅として静かに水はさざなみたてり。静かに夜寒の風はヴェニスの連柱に触れて呻き渡れり』という書き出しで三編二十五章百枚にわたり、古風ではあるが美しい文体で全編を完訳してあり、中学時代既に抜群だった博士の語学力の一端をうかがわせる」と。
- (12) 1909年1月1日付、2月11日付、5月25日付の朝河貫一宛坪内逍遙書簡（逍遙協会編『逍遙新集 坪内逍遙書簡集』第一巻、早稲田大学出版部、2013年、60-63頁）。
- (13) 朝河は友人ウィリアム・ブース（William Booth）宛書簡 [1921年2月6日付, Asakawa Papers, Box 4, Folder 41.] において、1920年6月に朝河の日本文化史担当助教授（Assistant Professor, History of Japanese Civilization）としての任期を終える際、イエール大学の財政難のため解雇されそうになったことに触れ、その後、歴史学部の尽力で同じ地位だが給料が半額になる条件で継続雇用となったことを述べる。これを裏付ける書簡として、イエール大学事務総長ストークス（A. Ph. Stokes）から朝河宛書簡 [1921年1月22日付および2月12日付、『福島県立図書館蔵 朝河貫一資料』E-385-16、E-385-19] があり、そこではイエール大学が朝河に対し、同じ地位だが給料を半額にし（年収3000ドルから1500ドルに削減）、3年継続雇用することを確約している。まさに任期が終わり解雇の危機にあった1920年6月に、朝河は逍遙に早稲田の職を求める書簡を出した。
- (14) 『書簡集』、276頁。
- (15) 以下、逍遙の日記については「逍遙日記」大正5年～昭和10年（逍遙協会編刊『未刊・坪内逍遙資料集』1～6、1999～2003年による）。
- (16) 春城の日記にはこの書簡について、「坪内逍遙ニ書状を發す」とあり（『双魚堂日誌』1921年2月13日、早稲田大学図書館所蔵）、さらに17日の日記に「在熱海坪内逍遙より來書」とあることから、逍遙から何らかの回答があったものと思われる。
- (17) 1921年4月15日付 朝河貫一宛坪内逍遙書簡（逍遙協会編『逍遙新集 坪内逍遙書簡集』第一巻、早稲田大学出版部、2013年、105-108頁）。同日の日記に逍遙は「漸く朝河へ返書を送る」と書いている。
- (18) 『書簡集』、291頁。
- (19) 『書簡集』、311-314頁。
- (20) 『書簡集』、328頁。
- (21) 福島県立図書館所蔵『朝河貫一資料』B117-4。
- (22) 1923年に朝河が「フランスの封建制」の授業担当になった背景には、イエールの歴史学部でこの科目が必要であったが適任者がいなかった事情もある。イエールの歴史学部教授チャールズ・シーモアは朝河宛書簡 [1923年2月23日付、福島県立図書館蔵『朝河貫一資料』E372-2] で、朝河が歴史学部で必要とする「フランスの封建制」の科目を引き受けてくれたことに感謝し、500ドル年俸を増やすことを述べる。また、朝河が

イェールで担当した西洋中世史の授業の全体像については、参照、甚野尚志「朝河貫一の西洋中世史の研究と教育活動—イェール大学所蔵『朝河貫一文書（Asakawa Papers）』の分析から—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第63輯（2017年度）、2018年3月、559-582頁。

- (23) 福島県立図書館蔵『朝河貫一資料』には、早稲田の演劇博物館から朝河が寄贈した逍遙から朝河宛書簡の受取状がある（B-231「1939年12月4日付。朝河宛の逍遙の書簡70通・朝河宛の坪内士行書簡34通寄贈への礼状」）。
- (24) 本書簡については別稿（前掲注4）でも詳述しているので参照されたい。
- (25) ただ逍遙は本書について「余り誤植多く候、再版出来候ゆゑ、改めてさしいたし候」（「坪内逍遙書簡 朝河貫一宛」1929年（昭和4）9月1日付、福島県立図書館所蔵『朝河貫一資料』B117-5）との書簡とともに朝河に再送している。
- (26) これら2著はいずれも矢吹晋編訳『朝河貫一比較封建制論集』（柏書房、2007年）に全文の日本語訳が収載されている。すなわち、
 - A. 311-323頁「日本史における農業」
 - B. 89-117頁「初期の庄と初期のマナーの比較研究」である。
- (27) “The Founding of the Shogunate by Minamoto no Yoritomo,” *Seminarium Kondakovianum, Recueil d’Etudes Archeologic, histore d’Art, Etudes Byzantines*, VI, Praha 1933, pp.109-129. [翻訳、矢吹晋訳「源頼朝による幕府の樹立」（『同上』、180-211頁）]。
- (28) Asakawa Papers, Box 51, Folder 237. “The Legislative Powers of the Frankish Kings.”
- (29) 研究会で藤原が取り上げた、朝河と市島春城、早稲田大学図書館との関係については、前述の別稿の他に、藤原秀之「朝河貫一の図書収集と早稲田大学図書館～市島春城への書簡を参考として～」（『早稲田大学図書館紀要』68、2021年）を用意したので、あわせて参照されたい。